「東坡禅喜集」について

荘　司　格　一

一

「東坡禅喜集」は東坡、すなわち宋の蘇軾（一〇三六～一一〇一）の禅の喜びにまつわる文を一書に編集したものである。東坡については詳述を要しまいが、[1] 文章家としては唐宋八大家の一人であり、政治家としては旧法党に属し、ために栄辱こもごもの生涯をおくる。死刑に処せられ、危機一髪にして死は免れたものの流罪の生活を送ることになる。[2] 烏台詩案とよばれ、中国における筆禍事件の最初とされる。かくて黄州に配流される。この地において東坡は仏教にふかく心を傾け、画期的な時期になったといわれる。のち復権し中央にもどるが、やがて地方に出で、再び中央に、ついで朝政誹謗の罪で流罪、ついに儋州に配謫される。儋州にあることほぼ三年、許されてもどる途中、常州で波瀾にみちた一生をおえる。六十六歳であった。

学識ゆたかで詩文[3]にすぐれることはいうまでもないが、絵画、書にも、料理や製墨にもその才能を揮った。詞においては新しい分野を拓き、政治家としては敏腕、教育者としても資質は豊かで幾多の俊秀を育成[4]した。まことに遠大之器というにふさわしい。

東坡が仏教に傾斜したのは黄州においてであるとされ、その心境は「黄州安国寺記」[5]にうかがわれる。そのなかにいう、

得城南精舎、曰安国寺、有茂林脩竹、陂池亭榭、間一二日輒往、焚香坐、深自省察則物我相忘、身心皆空、求罪垢所従生、而不可得、一念清浄、染行自落、表裏翛然、無所附麗、私竊楽之、五年於此矣、

私竊楽之、ひそかにこれを楽しむ、ということに注目しておきたいとおもう。内心の深い喜びを、それは自分だけのものとしておく、ということであるからである。わざわざ他人に語ることはいらないのだ、という心境の深さを表現している。もっともこれには烏台詩案における反省がある。この文の前に、

上不忍誅、以為黄州団練副使、使思過而自新焉、

といい、「到黄州謝表」（文集　巻二十三）には、

臣已於今月一日到本州訖者、狂愚冒犯、固有常刑、仁聖矜憐、特従軽典、赦其必死、許以自新、祗服訓辞、惟知感涕、中謝、伏念臣早縁科第、誤忝縉紳、（中略）豈謂尚玷散員、更叨善地、投畀麏鼯之野、保全樗櫟之生、臣雖至愚、豈不知幸、（後略）

とも述べる。ともに自新という語が見えることも注意されよう。修行にうちこむことによって自らを新らたにせん、との決意もあったのであろう。このようにして五年をすごすのである。

二

東坡と仏教とのかかわりは以上に見た如く安国寺にはじまるように考えられるが、じつはそれより以前にふかくかかわっている。たとえば、「四菩薩閣記」（文集巻十二）は熙寧元年十月二十六日に書かれるが、それには、

既免喪、所嘗与往来浮屠人惟簡、誦其師之言、教軾為先君捨施必所甚愛与所不忍捨者、

と見え、以前より交際をもった惟簡という僧侶[6]のおったことが知られる。また、「秦太虚題名記　并題名」（文集巻十二）には、

覧太虚題名、皆予昔時游行処、閉目想之、了然可数、始予与弁才別五年、乃自徐州遷於湖、至高郵、見太虚、参寥、遂載与俱、弁才聞予至、欲扁舟相過、以結夏未果、太虚、参寥又相与適越、云秋尽当還、而予倉卒去郡、遂不復見、明年予謫居黄州、弁才、参寥遣人致問、且以題名相示[7]、

と見える。これが書かれたのは黄州流罪ののちのことであるが、それより以前から、参寥とゆききのあったことが知られよう。参寥とは僧侶で、

近有一僧名道潜、字参寥、杭人也、特来相見、詩句清絶、可与林逋相上下、而通了道義、見之令人蕭然、有一詩与之、録呈、為一笑也、（与文与可十一首之十[8]）

と見える。清絶な詩句でもって林逋[9]と相上下するという僧である。この参寥との交際はふかかったようで、賛、題跋、尺牘などにその交遊がうかがえるほか、詩の応酬もある。参寥子賛にはつぎのように見える。

東坡居士曰、維参寥子、身寒而道富、弁於文而訥於口、外厖柔而中健武、与人無競、而好刺譏朋友之過、枯形灰心、而喜為感時玩物不能忘情之語、此余所謂参寥子有不可曉者五也（文集巻二十二）

とたたえる。いつのころから交遊があったのかは知りがたいが、「与参寥子二十一首」（尺牘文集巻六十一）によると、

別来思企不可言、毎至逍遥堂、未嘗不悵然也、（第一首）

とあり、徐州で書かれたと注されるから、熙寧十年、あるいはその翌年の元豊元年以後のことである。つまり黄州流罪以前に交遊があったことが知られる。

参寥のほか、東坡が交際した僧侶は数多いし、寺院を訪れ、宿り、また経典に題するなど、さまざまに仏教とかかわっていたことが知られる。

東坡と仏教のかかわりについて、父蘇洵と仏教の関係も考えておくべきであろう。父の影響もあると考えられるからである。「続伝燈録」によると、洪州上藍順禅師と親交があったことがうかがえる。禅師は、

西蜀人、有遠識、為人勤渠純至、叢林後進皆敬愛之、初出蜀時、与圜通訥偕行、已而又与大覚璉遊甚久、又善於老蘇公、（巻十六）

と記される。また、「明道雑志」に、

范蜀公不信仏説、大蘇公嘗与公論仏法、其所以不信之説、范公云、鎮平生事、非目所見者、未嘗信、蘇公曰、公亦安能然哉、設公有疾、令医切脈、医曰寒、則服熱薬、曰熱、則餌寒薬、公何嘗見脈、而信之如此、何独至于仏必待見耶、

と見え、蘇洵が仏教に対して深い理解をもっていたことが察せられよう。父の影響のあったことは東坡の弟、蘇轍にうかがえる。蘇轍がこの父と親交のあった順禅師をたずねて、心法をたずねると、搐鼻の因縁を示され、省するところがあり、偈を作った。

中年聞道覚前非　邂逅相逢老順師
搐鼻径参真面目　掉頭不受別鉗鎚
枯藤破納公何事　白酒青鹽我是誰
慚愧東軒残月上　一杯甘露滑如飴

と省悟の境界をのべる（五燈会元巻十八）。かくして上藍順禅師の法を嗣ぐ。蘇轍の悟道の機縁は父によるものであるとしてよかろう。東坡はとくに父の仏教のことに言及はしていないようであるが、弟轍とおなじくなんらかの影響をうけているであろうと考えられる。

蘇轍の仏教について東坡は敬意をはらっていたかに見える。

兄自覚談仏不如弟、（与子由六首之四　文集　佚文彙編巻四　尺牘）

という。注によれば、此簡作於天祐五年とある。一〇九〇年で東坡五五歳のときである。さらに、

子由為人、心不異口、口不異心、心即是口、口即是心、近日忽作禅語、豈世之自欺者邪、欲移之老兄而不可得、如人飲水、冷暖自知、死生可以相代、福禍可以相共、惟此一事、対面相分付不得、珍重、珍重、（与子由弟十首之二文集巻六十）

とみえる。注によれば黄州にて書いたという。

また、詩の題に、

子由作二頌、頌石臺長老問公、手写〈蓮経〉字如蟻、且誦万遍、脇不至席二十余年、予亦作二首、（東坡詩集巻二十二）

とあり、子由が石臺長老のために頌を作っていることが知られる。また、「欒城遺言」には、

大悲圜通閣記、公偶為東坡作、坡云、好个意思、欲別作而卒用公、所著和陶詩擬古九首、亦坡公代作、

と見える。蘇轍が東坡の代作をしたということで、しかも東坡が感歎していることも注目されよう。この「大悲圜通閣記」と題する一文は「蘇軾文集」には見えない。「大悲閣記」と題する文は成都府と題下に注するのと、杭州安国寺と注するのと二篇がおさめられるが、あるいは成都府と注する一篇のことであるかもしれない。

このように見てくると、弟の蘇轍のほうが東坡より仏教に精通し、省悟の境界もすすんでいたと見てよいかもしれない。

三

つぎに東坡の詩詞によってみてみよう。黄州流罪以前に仏教と深くかかわっていることがうかがえる詩には、

海会寺清心堂

南郭子綦初喪我
西来達摩尚求心
此堂不説有清濁
遊客自観随浅深
両歳頻為山水役
一渓長照雪霜侵
紛紛無補竟何事
慚愧高人閉戸吟

（巻十二）

和文与可洋川園池三十首

無言亭（其十五）

既勤稽首維摩詰
敢問如何是法門
禅指未終千偈了
向人還道本無言

（巻十四）

送参寥師

上人学苦空　百念已灰冷
剣頭惟一吠　焦穀無新穎

胡為逐吾輩　文字争蔚炳
新詩如玉屑　出語便清警
退之論草書　万事未嘗屏
憂愁不平気　一万筆所騁
頗悟浮屠人　視身如丘井
頽然寄淡泊　誰与発豪猛
細思乃不然　真巧非幻影
欲令詩語妙　無厭空且静
静故了羣動　空故納万境
閲世走人間　観身臥雲嶺
鹹酸雑衆好　中有至味永
詩法不相妨　此語更当請

（巻十七）

最初にあげた詩は熙寧七年六月～十二月中の作、つぎのは熙寧九年中の作、第三首は元豊元年の作である、とされる。すなわち、東坡三十九歳、四十一歳および四十三歳のときの作である。これらの詩が仏教にかかわることはいうまでもないであろう。このほか、寄清渓寺、留題峡州甘泉寺（巻一）、次韻水官詩（巻二）、真興寺閣禱雨、太白山下早行、至横渠鎮、書崇寿院壁（巻三）、秀州僧本瑩静照堂（巻六）、自金山放船至焦山、臘日遊孤山訪恵勤恵思二僧、吉祥寺僧求閣名、宿臨安浄土寺（巻七）など、枚挙にいとまない。塩官絶句四首（巻八）の第二首北寺悟空禅師塔と題する詩、

已将世界等微塵
空裏浮花夢裏身
豈為龍顔更分別
只応天眼識天人

など、仏教の理解なしには到底うたいえないであろう。

また、詞においても幾首か見られる。たとえば南歌子、

萋萋中秋過
蕭蕭両鬢華
寓身此世一塵沙　。全宋詞作化
等着潮来潮去　。全宋詞作看
了生涯

方士三山路
漁人一葉家
早知身世両聱牙
好伴騎鯨公子
賦雄誇

熙寧七年の作、東坡三十九歳のときであり、やはり仏教とふかくかかわることはいうまでもないであろう。

また、写経に金剛般若波羅蜜経があり(10)（年代不詳、明呉寛旧蔵と注される）、仏教へ心をよせていたことが知られ

る。

四

東坡の禅喜を編輯した「東坡禅喜集」について「四庫全書総目」には浙江巡按採進本として、

十四巻、明凌濛初編、濛初有聖門伝詩嫡家、已著録、先是徐長孺嘗取蘇軾談禅之文、彙集成編、唐文献序而刊之、濛初以其未備、更為増訂、万暦癸卯、濛初与馮夢禎遊呉閶、舟中各加評語於上方、至天啓辛酉、与山谷禅喜集竝付之梓、濛初喜取前人小品、以套版刻之、剞劂頗工、而無稗芸苑、此亦其一種也、

と記される。これによると徐長孺という人物が蘇東坡の文中、禅に関するものを選んで編み、それに唐文献が序文を付したものに、明の凌濛初が増訂し、さらに馮夢禎とともに評語を加えた[11]、ということになる。

現在寓目できる「東坡禅喜集」は和刻本までふくめると四種ある。

一、真寔居士馮夢禎批点　即空居士凌濛初輯増の東坡禅喜集と題する十四巻本、（以下凌本と略称）

一、陳眉公先生選[12]　蘇東坡先生禅喜集と題する九巻本、（以下陳本と略称）

三、元禄二年龍集己巳正月穀日　雒陽書肆中野伯元繡梓　新雕　禅喜集と題する九巻本、（以下和刻本と略称）

四、森大狂編　東坡禅喜集　九巻本　禅林叢書所収、（以下活字本と略称）

である。目次をつぎにあげよう。

凌本	陳本	和刻本・活字本ともに陳本に同じい。
一目頌	頌第一	
二目賛	賛第二	
三月偈	偈第三	

四目銘　銘第四
五目書　記第五
六目記　書諸経後第六
七目序　序伝文疏書第七
八目伝　禅喜紀事第八
九目文　仏印問答語録第九
十目疏
十一目雑文
十二目書
十三目雑志
十四目禅喜紀事

分類においても内容においても差異のあることがすぐ見てとられよう。凌本の雑志七則は陳本に見られず、陳本の仏印問答語録は凌本にとられない。

凌本は扉なく、ついで希維居士陸樹声[13]の題と陳継儒の序があり、本文にはいり、最後に馮夢禎の跋、凌濛初の識語と跋が付される。馮夢禎の跋には万暦癸卯春日と、凌濛初の跋には天啓辛酉春と記される。凌濛初の識語は、

此開之先生跋余元板伝燈録語也、先生批閲両禅喜、竟余無公海内意、故不及書其数語作序、今不可追矣、聊附此以見先生禅宗之一班可其所称、玄房則余稚年時旧字也、

で、これよりすれば馮夢禎の批語を凌濛初が整理したと考えてよいであろう。その跋文には、又点閲二禅喜集、と見え、この二禅喜集とは蘇黄のである、という。蘇はもとより蘇東坡のことであり、黄は黄山谷のことである。それは

馮夢禎の批語によって知られる。五目書の書孫元忠所書華厳経後に、

陳眉公曰、蘇黄題跋人並推重、全如煙光花気、若有若無、山谷遠不逮公、

と見えることによってである。黄山谷には「山谷禅喜集」二巻があることは「四庫全書総目」に見え、内府蔵本として、

明陶元柱編、元柱始末未詳、是集於黄庭堅集中、録其闡発禅理者、則為一書、蓋欲以配東坡禅喜集也、

と見える。わが宮内庁書陵部に「山谷老人禅喜集」二巻が所蔵されてあるが、未見であるため山谷の文集である「予章黄先生文集」によって見ると、銘、賛、頌、序、記などに仏教や僧侶にかかわる記述が見える。ことに注目されるのは語録の序文が五篇見られることである。[14] 翠巌真禅師、雲居祐禅師、大潙喆禅師、翠巌悦禅師、福州西禅遅老の五人の語録の序である。東坡には語録の序がないからであるが、なぜ東坡が語録の序を書かなかったのか、あるいはその依頼がなかったのかよくわからない。山谷の「宋史」の伝(四四四)によると、東坡はその文を「瓌偉之文、妙絶当世、孝友之行、追配古人」といい、重んじたという。山谷道人と自ら称するのは山谷寺石牛洞にのぞんで、林泉勝を楽んだことにちなむと記される。伝中には仏教とのかかわりを示す語は一字も見えず、東坡の伝にも見られぬことと轍を同じくする。しかし、語録の序文を五篇も書き(うち一篇は後序)、その叙述も、たとえば大潙喆禅師語録の序は、

喆禅師、烹仏祖鑊鞴、鍛十地鉗椎、坐大潙山孤峯万仞、倒用魔王之印、追大軍於藕絲孔中、全提金翅之威、取毒龍於生死海底、擊毒塗鼓、死却偸心伝法蝮蛇、命与雪山薬吐却室中密語、野狐誕落、相如之璧無瑕、(中略) 昔石霜山中生三虎、其一為黄蘗南、其一為翠巌、真黄蘗之虎、乳数子、皆哮吼、一方弭伏百獣、而翠巌之虎生一夔、是喆禅師、余不能尽賛其道、而以印於余心者、書之潙山語録之後、後世僧中有董孤、深知正法眼蔵之樞紐、能持直筆使雅頌各得其所、必将有取於斯文、

と述べる。喆禅師の法力を虎にたとえ、自分も禅師によって会するところがあった、ということがうかがえ、その境

界もかなり深いものであるようにおもう。陳眉公の評すように山谷遠不逮、というのはいかがであろう。

凌本には、上段の欄外に朱字で批語が加えられ、時には本文中に短かい傍批、文末に批語が付される。批語は馮夢禎と凌濛初の二人のみのではない。茅鹿門（茅坤）、王聖俞、李卓吾（李贄）、卓老（李卓吾？）、楼迂斎、陶石簣（陶望齢）[15]のほか陳眉公（陳継儒）の名が見える。陳眉公曰、として五条見えるのであるが、このことは陳本と凌本のかかわりを暗示しているようである。陳本にはあるいは陳継儒の批語が書きこまれてあり、それを凌濛初も見ており、馮夢禎とともに増訂したのを整理したときにとるべきものをとったのではないか、と考えられる。現在の陳本には批語は加えられておらず、もし陳継儒が書きこんであったとすれば、上梓の際に削去したのであろう。もとよりこれは推測でしかないが、しかし疑問がないではない。「明史」の芸文志釈家類には「東坡禅喜集」という書名は見えず、馮夢禎、凌濛初の著述にも禅喜集の名は見えない。陳継儒にも見えない。つまり正史の記録としては「東坡禅喜集」の名は見えないということである。換言すれば、成立や編者についても疑問がのこされるということである。このことに関して葉徳均は「四庫全書総目提要」巻一七四の記述にしたがい、凌濛初事跡繫年[16]において、

万暦三十一年癸卯（一六〇三）、二十四歳、服闋、上書国子祭酒劉氏、与馮夢禎遊呉、合評東坡禅喜集、

と記す。編者を凌濛初としていると見てよいであろうが、さきのことを考えるとやはり疑問はのこる。そのもとずくところが示されないからである。

つぎに陳本は扉があり、陳眉公先生選　蘇東坡先生禅喜集　と三行に書かれる。ついで題東坡禅書と題する希維居士陸樹声の題、東坡禅喜集序として陳継儒が題する。ついで心空居士唐文献の跋東坡禅喜後と題する跋文、目録、本文の順に編集される。陳継儒の序には、

唐宋而後、天下無才子、聴明弁才之士往往而竄為高僧、如永明覚範大慧中峰、其所為文章、縦横自在、有今之文人不能措一語者、然而独漏網眉山一長公何也、長公少年之文、与欒城先生皆得老泉法、而終未尽其変、

と述べられるから、自らが編集した、といわんばかりであるが、このあと、

此集輯自徐長孺而唐元徴欲刻之以示同志、且広諸才子之学、為文而窮於変者、

という。徐長孺が集輯し、唐元徴すなわち文献が印刷に付したというのである。さきにあげた「四庫全書総目」の記述のとおりである。徐長孺についてはよくわからない。徐長孺と陳継儒とのかかわりもわからない。もしも徐長孺が集輯したのを祖本とすれば、凌濛初と陳継儒がそれぞれ別個に増訂したといえるであろう。

陳継儒の選と記すのにはあるいはよるべきことがあるのかもしれない。陳継儒には、「全像按鑑演義南北両宋志伝」の「南宋志伝」の第一葉に雲間陳継儒編次とあり、また、「東西漢」には陳眉公評とあり、「重刻京本増評東漢十二帝通俗演義」にも陳眉公増評とあり、「春秋列国志伝」には陳眉公序があり、「風流十伝」には陳継儒の序があり、「新鐫国朝名公神断詳情公案」には陳眉公編とある（孫楷第「日本東京所見中国小説書目」による）。また、「列国志伝」の十二巻本は「新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝」と題し、序があり、雲間陳継儒重校と題する。「宋伝」、「宋伝続集」のうち南宋の部は陳継儒編次とする（孫楷第「中国通俗小説書目」による）。[17] このほか、「太平清話」「偃曝余談」、「眉公羣砕録」、「枕譚」の著述がある。

小説が士大夫階層からほとんど問題にされなかった時代に、このように史伝や公案小説などの通俗小説を編纂し、序文を題するなど、しかも実名を以てするなどは小説に対して高い評価を認めていたからであろう。明史の伝に見える如く陳継儒は年二十九、儒の衣冠をとって焚きすて、崑山之陽に隠居し、招きをうけても出ず、門をとざして著述に専念した。その詩文は世に尊重され、瑣言僻事を刺取して、詮次して書となれば、遠近のもの競って購い写した、という。礼教にこだわることもなかったのであろう。ほとんど価値を認められることのなかった小説にも取るべきもののあることを見とおしていたからであろうとおもわれる。そしてまた、このような見識、態度に共鳴し、敬意をはらい、あるいは小説に対しても同じように評価を与えていた人々も決して少なくはなかったのではないか、とおもう。[18]

たとい仮託であるにせよ、陳眉公をそれほどに評価しているからにほかならない。

さて、陳本には巻九に仏印禅師との問答録をおさめるが、凌本にはない。これは陳継儒の識見によって加えられたものと考えうる。東坡は語りものにも、また小説にも登場する。三言や「清平山堂話本」、「酔翁談録」にも東坡にまつわる話柄がいくつか見られるから[19]、東坡と仏印の問答を一本に編んだ問答録を禅喜集に加えたのであろう。ここにも陳継儒の小説に対する見解がうかがえるようにおもう。

和刻本について見てみよう。扉には、新雕の二字を横にし、その下に禅喜集の三字を中央に、元禄二季龍集己巳正月穀日を右に、雒陽書肆中野伯元繡梓を左に、それぞれ縦に書かれる。ついで眉山居士小像、つぎに陳継儒の東坡禅喜集序、陸樹声の題東坡禅喜、ついで目録、本文の順に編纂される。本文第一葉には、銭塘　楊爾曽聖魯校書　潭邑書林熊玉屏繡梓と二行に記される。

活字本はその例言によると、正禄二年正月開雕の旧本に依り校しぬ、といい、また、舶来本をも参考に供しぬ、という。舶来本とは唐本をいうのであろうが、凌本か陳本かいずれとも知りがたい。序の順序よりすれば、陳本によりながら、唐文献の跋は、跋東坡禅喜後とあるのによってか、末尾に付してある。もし凌本によったとすれば序の順序をかえ、内容については問答録を他書、おそらくは陳本から採ったものであろう。とすれば参考にしたのは凌本と陳本の二本であったのかもしれない。いささか問題の残るところである。

五

内容についていささか検討を加えよう。例文は陳本によってひくことにする。頌第一の冒頭は釈迦文仏頌と題する一文で、序が付される。亡妻王氏の供養のため、釈迦文仏および十大弟子の像を議郎の李公麟に請うて画いてもらい、元祐八年十一月十一日、水陸道場を設けた。そのとき拝手稽首して作った頌である、という。

東坡の妻王閏之が卒したのはこの年の八月一日のことである。四十六歳であった。東坡五十八歳、礼部尚書であったが、この年の十一月には定州軍州事に命ぜられ、任地に着いてまもなくの頃のことである。画をえがいた李公麟の伝は宋史に見える（巻四四四）[20]。人物画にすぐれたといわれる。仏画もえがいたのであろう。これをもって頌をつくった。

我願世尊　足指接地
三千大千　浄瑠璃色
其中衆生　靡不解脱
如日出時　眠者皆作
如雷霆時　蟄者皆動
同証無上　永不退転

世尊が足の指で地をおさえると、三千世界は瑠璃色となり、そこにいる衆生はすべて解脱する。日がでると眠っているものはみんなおき、雷がなると穴になかにいるのがみんな動きだすように、ひとしく無上のさとりをえて、ふたたびそれを失うことのなからんことを、

というのであろう。凌本に付す注には茅鹿門曰くとして、

東坡頌、此等文字韓欧所不欲、為此等見解、韓欧所不能及、由蘇長公少悟禅宗、及過南海後、遍歴幻劫、以此心性超朗、乃至于此、可為絶世之文矣、

と絶賛する。また、王聖俞曰、として

坡公諸頌得意処、冥然忘言、

という。

頌にはこのほか、阿弥陀仏頌、観世音菩薩頌、石恪画維摩頌など十一則、ついで賛第二には如来出山相賛、阿弥陀仏賛、また弁才大師真賛、無名和尚伝賛など二十七則、偈第三には霊感観音偈、無名和尚頌、観音偈など十七則、銘第四には真相院釈迦舎利塔銘、広州東莞県資福寺舎利塔銘など十八則、記第五には大悲閣記、勝相院経蔵記など十三則、書諸経後第六には書孫元忠所書華厳経後、書若逵所書経後など八則、序伝文疏書第七には送銭塘僧思聡帰孤山叙、僧円沢伝、南華長老重弁師逸事、祭龍井弁才文、請浮慈法涌禅師入都疏、怪石供、荅参寥書など、十二則をおさめる。このあと禅喜紀事第八、仏印問答語録第九とつづくが、この二巻については後にふれる。

このように見ると、東坡は経典、仏像、僧侶などにさまざまにかかわっていることが知られよう。

内容の検討にもどり、つぎに俗に廬山三偈として知られる三首について考えてみよう。陳本巻之八は禅喜紀事と題して三十五則をおさめるが、第十六則には二首が記される。

東坡遊廬山、至東林作二偈曰、

溪声便是広長舌　山色豈非清浄身
夜来八万四千偈　他日如何挙似人

横看成嶺側成峯　遠近看山了不同
不識廬山真面目　只縁身在此山中

山谷曰、此老於般若横説竪説、了無剰語、非筆端有口、安能吐此不伝之妙乎、

と見える。「冷斎夜話」に出ず、と注される。これには二首が見えるのみである。廬山三偈のもう一首は、

廬山煙雨浙江潮　未到千般恨不消
到得還来無別事　廬山煙雨浙江潮

である（東坡居士の禅喜、廬山の三偈　大内青巒講述による）[21]という。しかし、蘇東坡全集、詩編注集成にもこの詩

は見えないようである。大内師の講述によれば、横看為嶺の詩を第一首とし、廬山煙雨の詩を第二首、渓声便是の詩を第三首とし、見地が次第に進んだ順を示すものである、といわれる。そうであるとすれば第二首は第一段階から最終段階に至るその過程を示す要があろうとして、第二首として加え、三偈としたものであろう。

東坡には廬山をうたった詩が数首ある。初入廬山三首（巻二十三）送芝上人游廬山（巻三十五）過廬山下（巻三十八）、遊廬山、次韻章伝道、廬山五詠（巻十三）、廬山二勝（巻二十三）などがある。廬山二勝には叙があり、

余游廬山南北、得十五六奇勝、殆不可勝紀、而懶不作詩、独択其尤佳者作二首、

とある。この叙によれば廬山の奇勝はさまざまであるが、詩をつくる気になれず、もっとも心を動かされた二つの景色についてのみ詩をつくったということであろう。おそらく東坡の詩はすべて記録されたであろうから、他に廬山をうたう詩があろうとは考えにくい。

また、この詩は第一句と第四句とを同じくするという修辞上の工夫がこらされていて、大内師は第一句の意味にいで、またそこに戻る、それは仏教の説くところとおなじである、といわれる。そうだとしてもいささか技巧的にすぎるのではなかろうか。修辞としてもいかがであろう。山谷の評語のごとく、不伝の妙を伝ええているであろうか。おそらくは東坡の作ではなく、他の作をとりあげて三偈としたものでないかとうたがわれる。

つぎに序伝文疏書第七　僧円沢伝をとりあげよう。

李源は父の死後、仕えず娶らず、肉を食さぬことを自ら誓い、寺に居ること五十年余りに及んだ。僧円沢と親しく交わっていた。ある日、蛾眉山に遊びにゆくことになり、荆州を通ってゆこうといったところ、円沢はいけない、といったが、ついに荆州を通ることになった。南浦にゆくと婦人が水をくんでいる。それを見て円沢は泣きだし、あの婦人の子どもになるのだ、といい、三日後にきて見てほしい。赤ん坊が湯をつかっていて、にっこり笑うのがしるしだ。そして十三年後中秋の月夜に杭州の天竺寺の外でお会いします、といった。三日して婦人のところにゆ

くと、はたして赤ん坊はにっこり笑った。十三年目、約束どおりゆくと牧童が歌をうたっている。

三生石上旧精魂　賞月吟風不要論
慚愧情人遠相訪　此身雖異性長存

円沢はお元気か、とたずねると、あなたはまことの人物だ。しかし、俗縁がまだつきておらぬ。近づいてはなりません。ただ勤めて堕することがないようになったらお会いします、といい、またうたった。

身前身後事茫茫　欲話因縁恐断腸
呉越山川尋已遍　却回烟棹上瞿塘、

そして姿をけした。のち二年して李徳裕が李源を忠臣の子であるからと推薦、奏上したため諫議大夫を拝したが、就かず寺にてその生涯をおえた。

という。これは蘇東坡全集に注を記すように、袁郊の甘沢謠におさめる円観と題する小説[22]によるものである。叙述に出入はあるものの、大意はかわらない。ただ円観を円沢とし、十二年後を十三年後とするほか、円観の語に、其中孕婦姓王者、是某託身之所、踰三載尚未娩懐、以某未来之故也、今既見矣、即命有所帰、釈氏所謂循環也、とあるが、これを、婦人王氏、吾当為之子、孕三歳矣、吾不来、故不得乳、今既見、無可逃者、といいかえてある。釈氏の循環であるというのを削去するのは、東坡の考えによるのであろうが、あるいはこのような生まれかわりを仏教でいう輪廻とわざわざいわずとも、そこまで察せよ、ということなのかもしれない。それは東坡自身で言ったともいわれる、自分は五祖戒の生まれかわりであるということをふまえているのかもしれない。これは陳継儒の題にも、公為五祖戒後身、と見え、かなり知られたことであった。東坡も輪廻を信じたのであろうし、この七字を削去したことはそれなりの意をこめていると考える。

六

つぎに禅喜紀事（巻八）についてみてみよう。陳本には二十七則を、凌本は目次には三十二則と記すが、本文にはさらに八則を加え、三十五則を記す。これらは他書より選集したもので、「冷斎夜話」、「西湖遊覧志余」、「唾玉集」、「詩話総亀」、「百斛明珠」、などの出典を示すほか、蘇籀、張商英、黄魯直など人名も見え、それらは話柄を提供したのであろう。また、余送曹詩、慎和余詩、子由答余詩、子由答慎詩、余和慎詩など詩より引くのも見える。凌本にはこれらのほか、師民瞻詩注、破琴詩引、張耒、外紀、志林などと注される。

この禅喜紀事の冒頭には「冷斎夜話」より引き、さきにふれた東坡が五祖戒の生まれかわりであることにかかわる話がおかれる。

雲安が夢に東坡が五祖戒禅師の生まれかわりであることを知らされる。そこに聡禅師と子由がきて、同じ夢を見たといっているところに東坡の手紙がきて、まもなくお目にかかれるという。東坡がきて夢の話をすると、東坡も七・八歳のときいつも僧の夢を見ていたし、母が妊娠したときもひとりの僧が投宿するのを夢に見た、といった。という話である。のち偈を作ったという。その偈は次のようなものである。

悪業相纏四十年　常行八棒十三禅
郤(ママ)着衲衣帰玉局　自疑身是五通仙

八棒十三禅とは八棒対十三のことであろう。「碧巌録」第十六則の頌の注にみえる。鼻孔為什麼却在山僧手裏、八棒対十三、儞作麼生、放過一著、便打、とある。少を以て多に充つ意であると注釈される。五通仙とは五種の神通力をもつ仙人という意であろう。五通化とは、

瑜伽三十三巻十五頁云、復次依止静慮、発五通等、云何能発、謂静慮者、已得根本清浄静慮、即以如是清浄静慮、

為所依止、於五通増上正法、聴聞受持、令善究竟、謂於神境通、宿住通、天耳通、死生智通、心差別通等、作意思惟、復由定地所起作意、了知於意、了知於法、由了知義、了知法故、如是如是、修治其心、由此修習多修習故、有時有分、発生修果五神通等、

二解、大毗婆沙論一百四十一巻十三頁云、五通者、一、神境智通、二、天眼智通、三、天耳智通、四、他心智通、五、宿住随念智通、此五、皆以慧為自性、已説自性、当説所以、問何故名通、答於自所縁、無倒了達、妙用無礙、故名為通、如彼広説、（法相大辞典による）

とあり、また、「正法眼蔵、神通」の篇にもみえる。

この偈は「蘇東坡全集」には収められないし、「冷斎夜話」の文（巻七）にもみえない。「冷斎夜話」では雲庵に作るし、東坡が呉州に左遷されたときであること、またこの偈の由来を記さない。つまり原典よりさらにふくらませているのである。注意されてよいようにおもう。

もう一則、注意すべきは「詩話総亀」に出ずという子由にまつわる話である。

子由誦楞厳経悟一解六亡之義、自言、於此道更無礙、然其作風痺詩、乃有数尽、吾則行未堕冥漠之句、則於理尚有礙也、而東坡乃謂、子由聞道先我何耶、

とあり、ついで詩をひく。さきにもふれたが東坡と子由の仏教の理解のほどがうかがえるからである。東坡に先んじて楞厳経をよみ六亡の義を会得したということである。六亡とは六妄のことであろう。六根よりおこる六種の煩悩のことで、そこより解脱することをすぐに悟り得たということであろう。六妄について「首楞厳経」巻第四に次のように説かれる。

復次富楼那、明妄非他、覚明為咎、所妄既立、明理不踰、以是因縁、聴不出声、見不超色、色香味触六妄成就、由是分開見覚聞知、

妄、つまり煩悩が生じるのは他の縁によっておこるのではなくて、自分の心におこるもので、心をきわめていないから、妙理がさえぎられて、ついに煩悩になる。それがさらに因となり縁となって六根における煩悩が生じるのである、ということであろう。

つぎに凌本に加筆される八則についてみてみよう。

師民瞻詩[23]注に云く、として仏印と東坡との交遊についての逸話である。東坡が仏印に師の四大を借りて禅床としたい、というと、かえって仏印にやりこめられ、玉帯を差上げた。仏印は衲裙をおくった、という。詩二首が付される。

破琴詩[24]引のは琴の絃についての話であり、張耒[25]と注する話は、范蜀公と大蘇公とが仏について論じあったことで、范蜀公は仏を信じない。蘇公は病気と薬の関係を例にとって説ききかせた。「円鉛摠録」のは士大夫の排仏について東坡はそれは仏骨表となんのかわりがあろうかとのべた。

燕石斎補五燈会元[26]のは、東坡が玉泉皓禅師に参禅し、わたしは姓を秤というが、天下の長老の軽重をはかるのだ、というと、禅師は一喝し、この喝の重さはいかほどかと問う。答えず、改めて礼をした。のち東坡は偈を作った。心是已灰之木、身如不繫之舟、問汝平生功業、黄州瓊州恵州、という。外紀のは石塔との問答を記す。志林の二則は、東坡が肉を食べて経を誦したところ、不浄であるといわれた。口をすすいだが、それできれいになれるか、といわれたという話、卓契順にむかい、みやげはなにか、と東坡がたずねると、手をのべた。空手できたのか、というと、荷をかつぐしぐさをして去った、という話である。

巻八、禅喜紀事には以上のほか、楞伽経や華厳経にまつわる話、卓契順、金山了元禅師、弁才、寿星寺の老僧と参寥子、雲閣梨、皎然禅師などの僧侶との話や、妓琴操、妾朝雲や黄魯直などのことなどさまざまな話題が見られる。

巻一から巻七までは頌、賛、偈、銘、記、書、序、伝、文、疏などで、禅戯頌（巻一）、とか戯頌仏印偈（巻三）など戯という文字を付すのもあるけれども、ほとんどが滑稽とか諧謔にはほど遠いものである。ところが巻八にはす

べてが滑稽、諧謔のものとはいえないまでも、逸話といってよい話がおさめられている。これはおそらくは巻九とかかわりをもつであろう、これについては次にのべよう。

七

陳本巻九は仏印問答語録と題し、仏印為僧以下四十三話（活字本はさらに馬上談の一則を加える）をおさめる。この仏印問答語録は内閣文庫に「東坡居士仏印禅師語録問答」と題して抄本が所蔵されるほか、宝顔堂秘笈に「陳眉公訂正問答録」と題しておさめられる。その題辞に、

東坡以世法遊戯仏法、仏印以仏法遊戯世法、二公心本無法、故不為法縛、而詼諧、浪不以順逆為利鈍、直是滑稽之雄也、彼優尭視之、失所拠矣、刻東坡仏印問答録、

万暦辛丑九月日　海虞清常道人趙開美識[27]

と見える。つまり、滑稽を主題とする問答の記録ということである。一、二例にとろう。

聯松詩と題するのは、

東坡過天竺、謁仏印、欵語間、因言、窗前両松昨為風折其一、悵恨成一聯、未得続其後、以示坡云、龍枝已逐風雷変　減却虚聰半日涼、坡続云、天愛禅心円似月、故添明月伴清光、仏印喜而歌、歎服不已也、

東坡の間髪をいれない即妙のみごとさが述べられる。

このような問答が多くみられるが、また、文字遊戯にかかわる話も見られる。

仏印長歌と題し、

東坡之妹聡慧過人、博学強記、尤工為文、有欲以秦少游議親者、妹索其所業、視之曰、秦之文粗足以敵吾子由之才、遂得伉儷、後東坡在翰林日、妹往省之、約奉来帰、適仏印以長歌寄坡、有勉其退休之意、坡読之猶少凝思、妹従旁

見之、一覧了然、歎曰、使汝作男子、名位必在我上、坡妹因喜得縦観翰苑未見之書、乃遣价報書于秦姑、遅其帰、因録仏印詩以示秦云、

野野　鳥鳥　啼啼　時時　有有　思思　春春　気気　桃桃　花花　発発　満満　枝枝　鶯鶯　雀雀　相相　呼呼
喚喚　岩岩　畔畔　花花　紅紅　似似　錦錦　屏屏　堪堪　看看　山山　秀秀　麗麗　山山　前前　烟烟　霧霧
起起　青青　浮浮　浪浪　促促　潺潺　湲湲　水水　景景　幽幽　深深　処処　好好　追追　遊遊　傍傍　水水
花花　似似　雪雪　梨梨　花花　光光　皎皎　潔潔　玲玲　瓏瓏　似似　墜墜　銀銀　花花　折折　最最　好好
柔柔　茸茸　渓渓　畔畔　草草　双双　蝴蝴　飛飛　来来　到到　落落　花花　林林　裏裏　鳥鳥　啼啼　叫叫
不不　休休　為為　憶憶　春春　光光　好好　楊楊　柳柳　枝枝　頭頭　春春　色色　秀秀　時時　常常　共共
飲飲　春春　濃濃　酒酒　似似　醉醉　閑閑　行行　春春　色色　裏裏　相相　逢逢　兢兢　憶憶　遊遊　山山
水水　心心　息息　悠悠　帰帰　去去　来来　休休　役役

秦回書外、即答短歌云、示及梵僧、歌詞重而意復、字字作聯珠、行行如貫玉、想汝直一覧顧我労三復、裁詩思遠寄、因以其類触、汝其審思之、安表予心曲、[28]

という、この詩の解は、

野鳥啼　野鳥啼時時有思　有思春気桃花発　春気桃花発満枝　満枝鶯雀相呼喚　鶯雀相呼喚岩畔　岩畔花紅似錦屏
花紅似錦屏堪看　堪看山　山秀麗　秀麗山前烟霧起　山前烟霧起青浮　青浮浪促潺湲水　浪促潺湲水景幽　景幽深
処好追遊　深処好追遊傍水　傍水花　花似雪　似雪梨花光皎潔　梨花光皎潔玲瓏　玲瓏似墜銀花折　似墜銀花折最
好　最好柔茸渓畔草　柔茸渓畔草青青　双双蝴蝶飛来到　蝴蝶飛来到落花　落花林裏鳥啼叫　林裏鳥啼叫不休　不
休為憶春光好　為憶春光好楊柳　楊柳枝頭春色秀　枝頭春色秀時常　時常共飲春濃酒　共飲春濃酒似醉　似醉閑行
春色裏　閑行春色裏相逢　相逢兢憶遊山水　兢憶遊山水心息　心息悠悠帰去来　帰去来休休役役

であるという。野鳥がなき桃の花は咲き、鶯もよびかわす。紅の花はみごと、山もひいでかすみもたなびく。川の流れさらさらと、そのあたりに咲く梨の花は雪のようにまっ白。柔らかにがまの穂はのび草は青く、蝴蝶は花にたわむれ、林には鳥がさえずる。楊柳の枝には春の色がいっぱい。うま酒をともにのめば心よく酔える。この春の遊びをすれば心おだやかにすごせるのに、という意であろう。東坡に退休を勧める意をふくむというのもうなづけることである。

この一文はそのまま小説にとりいれられる。「醒世恒言」第十一巻　蘇小妹三難新郎と題する小説である。入話に、曹大家、蔡琰、謝道韞、上官婕妤、李易安、朱淑真など女流文学者のことについて述べ正文にはいる。蘇洵の娘、小妹は生れつき聡明で、父をして、惜しいかな、男子に生まれたならば、科挙で名をなしたであろうに、といわしめたほどであった。王安石からその子王雱の嫁にと望まれたが、小妹はその文章をみて、秀気にあふれるが、みのれるものがない。おそらくは長くもつ人ではあるまい、といった。のち、十九歳で状元にて合格するが、まもなく世を去った。このようなこともあり、小妹の名は一時にあがった。文章によって相手を選んだが、秦観と結婚することになる。結婚式もすみ、秦観が部屋にはいろうとすると、庭に机があり、筆、墨、紙が列べられ、三通の封筒がある。女中がいて、この三つの問題を解いたうえで内におはいりください、という。二題までできたが、第三題に思案していると、東坡がまだねもやらずにいて、苦吟しているのをきき、小さな瓦けをかめのなかにポンとなげいれた。秦観は波紋を見て対句をつくりあげ、こうして香房にはいる。のち、仏印禅師が東坡に勇退をすすめる長歌をおくってきた。その詩は二字が百二十つらねてある。東坡は三度読んだがわからない。小妹はすぐ読みとった。畳字詩も三首示される。宣仁太后は小妹の才をきかれて詩を求められた。一篇さしあげるごとに宮中でうたわれた。のち、小妹は秦観に先立ったが、秦観は終身めとらなかった。

という。この小説には禅喜集の仏印長歌、および畳字詩、採蓮畳字詩、東坡畳字詩をそのままとりいれられて、一篇の小説に仕上げられた。このように明代の白話短篇小説と深くかかわっていることは注目されてよい。この問答録が

宋代の語りものの一派である説経のテクストではないか、と指摘されており[29]、そうであるとすれば、語りものと小説とのかかわりを考察する手がかりとなるからである。

これにつづく畳字詩は、

別離時聞漏転
憶　　静
期帰阻久伊思

関塵歌声嗽玉
一　　採
津楊線在人蓮

力微醒時已暮
愛　　賞
飛如馬去帰花

で、その解は、順に、

静思伊久阻帰期　久阻帰期憶別離　憶別離時聞漏転　時聞漏転静思伊
採蓮人在緑楊津　在緑楊津一関新　一関新歌声嗽玉　歌声嗽玉採蓮人
賞花帰去馬如飛　去馬如飛酒力微　酒力微醒時已暮　醒時已暮賞花帰

である。

また、禅喜集では長亭詩が示される。これは字形に工夫を加えたもので、たとえば、亭の丁を長く書き、盡の皿を口にし、拖を横むきにし、首をさかさまにし、暮の日を斜めにし、峯の山を小さくするなど、文字を十二ならべる。長亭、無人尽、横拖、回首、日暮、小峯などと読ませて七言絶句に仕立てるのである。

このような文字遊戯、ことに遊戯詩には、頭の字をかくす蔵頭詩[30]、上からよんでも逆に下から読んでも詩となる回文詩、真中に一字をおき、まわりを文字で円にかこむ綿纏枝玉連環文、文字を四、六、八、十、十、八、六、四と列ねて解読する双合文、析字法を用いる字訓詩、また狂詩、字謎などもあり、またいくつかの題からひとつを選んで作詩する探題、古人の詩句の一字をくじでひきあて、その字を韻字として作詩する分韻など、いくつもの遊戯がおこなわれた。わが国でも、双合文に高野山大徳院にその記録があり、蜀山人の作もあるという。浅草観音堂の扁額の裏に連環体の詩が書かれてあるといわれる。

このように見てくると、問答録は仏印との滑稽問答に終始するとしてよいであろう。そしてさきの巻八、禅喜紀事と共通の性格をもつ。つまり、ともに語りものに話題を提供したのではないか、と考える。東坡にまつわる逸話が、たとえば軽薄ということが強調されて小説にとりこまれることを考えると[31]、禅喜紀事も問答録と同様にまず語りものに話題を提供し、やがて小説にとりいれられる、と考えてよろしいのではないかとおもう。

八

以上、東坡禅喜集について、文学の面からいくつかの問題を残しながらもそのあらましを見てきた。禅喜の内容についてあえて深く立ちいらなかったのは禅学にくらいからである。しかし、それをもってしてもなお、陸声樹の題のなかにいう談じえて妙なる句をいくつか見出しうる。たとえば、羅漢賛第九、

以口誦経　以手歎法　是二道場　各自起滅　敦知毛竅　八万四千　皆作仏事　説法熾然

といい、また、唐衲賛に、

匣而蔵之　見衲而不見師　衣而不匣　見師而不見衲　惟師与衲　非一非両　眇而視之　蟣蝨龍象

といい、答范蜀公十一首の其十に、

死生寿夭皆常事　惟有後可以少慰

とみえるが、いずれも東坡の境界をうかがいうるようにおもう。

林語堂が東坡を評して、思想的にはインド人、気質的には中国人、そして道教徒の生を簡素化するという信仰から、新らたな合成物がこの詩人の精神と感性のるつぼのなかで形成された[32]、という。道教とのかかわりについては曹樹銘が羅浮山の道士鄧守安と東坡の往来について述べるが[33]、それによると、紹聖元年甲戌八月より翌二年乙亥六月まで交遊があったこと、さらに元豊三年五月には東坡は墨竹軸を作って贈った、という。その墨竹軸は現在ニューヨーク市第五街美術博物館に所蔵され、それには紹聖二年二月写贈羅浮鄧道師と題され、この鄧道師とは鄧守安であり、この軸を真蹟としてまちがいないであろう、といわれる。このように道士とも親交があったことも注意されよう。

仏老の思想は東坡にあっては政治の逆境のなかの主要な処世哲学となった。一面では現実逃避の消極的な傾向をもち、一面では曠達な態度の背後に、人生や美しい事物に対する執着と追求をつづけさすことになった、という指摘があるが[34]、はたして東坡にとっての仏教とは現実逃避のためのものであったろうか。黄州流罪以後急速に仏教に近づき、心の平安を求めたとするならば、たしかに現実逃避の意をふくめられようが、これまで見てきたように、父の影響もあったろうし、黄州以前すでに仏教にふかい理解を有していたとすれば政治上の挫折によってのみ仏教に近づいたのではない。むしろ一生を通じてその生き方を支えていたものと見るのがより妥当であるまいか。つまり、若い頃から仏教に接し、次第に理解を深め、黄州にて一層深め、真髄に迫りえた、そのような一生であったと見ることができはしまいか。その意味では林語堂の指摘を肯定したいとおもう。

小稿は不備を少なしとしない。ご叱正を賜りたい。

（注）

（1）東坡の伝は宋史巻三三八に見える。

（2）元豊二年（一〇七九）七月二十八日、御史台の官吏により東坡は逮捕される。神宗はすぐ御史台に命じ審理させた。御史たちの罪証の材料とした「蘇子瞻学士銭塘集」三巻はいま伝らない。しかし、宋、明九万「東坡烏台詩案」一巻、周紫芝の「詩讞」一巻、清、張鑒秋の「眉山案広証」などに記録される。

（3）東坡の詩文集は数多く出されてあるが、ここでは蘇文忠公詩編集成（中華民国六十八年八月　台湾学生書局）、蘇軾文集（孔凡礼点校　一九八六年三月　中華書局）、蘇東坡全集　一九八六年三月　北京中国書店）蘇軾詩集（王文誥輯訳　一九八二年二月　中華書局）、蘇東坡詞（曹樹銘校編中華民国七十二年十二月　台湾商務印書館）を使用した。

（4）絵画においては文湖州竹派の主要画家であり、書法においては黄庭堅、米芾、蔡襄とともに四大家といわれる。料理においてはいまも東坡肉とよぶ料理がある。製墨では紅を墨の中にいれて作った紅花墨を発明した。ちなみに黄州にて使った毛筆は鶏の羽の下の脇の毛の筋だけで作った鶏毛筆であるといわれる。高価な良筆を使うことができず、わずか三銭くらいのこの筆で書いたといわれる（長尾雨山　中国書画話　筑摩書房　昭和四十年三月）。詞においてはのちの辛棄疾とともに豪放派といわれる新しい分野を開拓した。政治家としてはたとえば杭州におったとき凶作に際して救済の策を講じ、また蝗の害についても対策を考えるなど、地方官として立派な成績をあげている。西湖にはいまなお蘇堤とよばれる大堤をきずいている（「萍洲可談」に見える）。教育者としては蘇門四学士あるいは六学士とよばれる俊秀を育成したことはよく知られよう。

（5）文集巻十二、又東坡禅喜集におさめる。

（6）惟簡とは宝月大師のことである。宝月大師塔銘（文集巻十五）に、宝月大師惟簡、字宗古、姓蘇氏、眉之眉山人、於余為無服兄、九歳、事成都中和勝相院慧悟大師、十九得度、二十九賜紫、三十六賜号、其同門友文雅大師惟慶為成都僧、統所治万余人、鞭笞不用、中外粛伏、慶博学通古今、善為詩、至於持律総衆、酬酢万物、則師密相之也、凡三十余年、人莫知其出於師者、（中略）紹聖二年六月九日、始得微疾、即以書告於往来者、勅其子孫皆仏法大事、無一語私其身、至二十二日、集其徒問日蚤暮、及辰、曰、吾行矣、遂化、年八十四、是月二十六日、帰骨于城東智福院之塔（後略）、と見える。このほか尺牘に、近有成都僧惟簡者、本一族兄、甚有道行、堅来要作経蔵碑、却之不可、遂与変格都作迦語、貴無可箋註、今録本拝呈、欲求公真迹作十大字、以耀碑首、（与滕達道五首之二）と見えるし、与程正

輔七十一首（文集五十四）之十五に、成都宝月大師孫法舟者、遠来相看、過筠、帯子田一書来、などと見える。かなり年長であったが親交をもっていたことが知られる。

（7）弁才のことは訥斎記（佚文彙編巻一）に、銭塘有大法師曰弁才、初住上天竺、以天台法化呉越、呉越人帰之如仏出世、事之如養父母、金帛之施、不求而至、居天竺十四年、有利其富者、迫而逐之、師欣然捨去、不以為恨、呉越之人、従之者如帰市、天竺之衆、分散四去、事聞於朝、明年俾復其旧、師黽勉而還、如不得已、呉越之人、争出其力以成就廃闕、衆復大集、無幾何、師告其衆曰、吾雖未嘗争也、不幸而立於争地、久居而不使去、人以己是非彼、非沙門、天竺之南山、山深而木茂、泉甘而石峻、汝舎我、我将老於是、言已、策杖以往、以茅竹自覆、声動呉越、（中略）乃作頌曰、以弁見我、既非見我、以茅見我、亦幾於妄、有叩而応、時止而止、非弁非訥、如如不動、諸仏既然、我亦如是、と見える。注によれば、咸淳臨安志・巻七十八　寺観四・寺院・龍井延思衍慶院に見えるという。また、この文は欒城集巻二十三に杭州龍井院訥斎と題して収められる、とも記される。作者がいずれか疑問とされよう。弁才にかかわる詩や文も散見されるが、跋太虚弁才廬山題名（文集巻七十一）には、太虚今年三十六、参寥四十二、某四十九、弁才七十四、禅師（大覚）七十六矣、とあるからそれぞれの年齢のちがいもうかがえる。

（8）蘇軾文集　佚文彙編巻二　尺牘

（9）林逋の伝は宋史四五七隠退に見える。字君復、杭州銭塘人、少孤、力学、不為章句、性恬淡好古、弗趨栄利、家貧衣食不足、晏如、初放遊江、淮間、久之帰杭州、結廬西湖之孤山、二十年足不及城市、真宗聞其名、賜粟帛、詔長吏歳時労問、薛映、李及在杭州、毎造其廬、清談終日而去、嘗自為墓於其廬側、臨終為詩、有茂陵他日求遺稿、猶喜曾無封禅書之句、（中略）逋善行書、喜為詩、其詞澄浹峭持、多奇句、既就稿、随輒棄之、或謂、何不録以示後世、逋曰、吾方晦迹林壑、且不欲以詩名一時、況後世乎、然好事者往往竊記之、今所伝尚三百余篇、（後略）という。

（10）蘇東坡詞の図片に見える。

（11）徐長孺という人物についてはよくわからない。唐文献の伝は明史二一六に見える。字元徴、華亭人、万暦十四年進士第一、授修撰、歴詹事、（後略）とある。また郭正域の伝（二二六）中に、選庶吉子、授編修、与唐文献同為皇長子講官、と見える。

凌濛初については明史に伝はたてられない。二刻拍案驚奇（古典文学出版社　一九五七　上海）の本書的介紹（王古魯）に字玄房、号初成、亦明凌波、一字波斤、別号空観主人、行十九、浙江烏程人、明神宗万暦八年生、万暦十九年年十二歳入学、天啓七年四十八歳、居南京、編撰拍案驚奇、崇禎元年四十九歳、拍案驚奇刊成（中略）、七年授上海県丞、署令事、凡八月、又署海防、居上海歴八載、崇禎十五年擢徐州判、十七年在房林抗拒農民武装、農暦正月十二日

嘔血而死、所著除二拍外、拠各家所蒐載、有聖門伝詩嫡家十六巻、附録一巻、言詩異六巻、詩逆四巻、詩経人物考、左伝合鯖、倪思、史漢異同補評三十二巻、嬴縢三劄、…東坡禅喜集（後略）と見える。

馮夢禎（一五四六～一六〇五）明史では林材の伝（二四二）、瞿九思の伝（二八八）のなかにその名が見えるが、「明人伝記資料索引」には、字開之、秀水人、万暦五年会試第一、官編修、与沈懋学、屠隆以文章気節相尚、忤張居正、病免、後復官、累遷南国子監祭酒、与諸生砥名節、正文体、尋中蜚語帰、年五十八卒、家蔵快雪時晴帖、名其堂曰快雪、有歴代貢挙志、快雪堂集、快雪堂漫録、と見える。

(12) 陳眉公先生とは陳継儒（一五五八～一六三九）のことで明史二九八隠逸に伝がある。字仲醇、松江華亭人、幼穎異、能文章、同郡徐階特器重之、長為諸生、与董其昌齊名、太倉王錫爵招与子衡喜読書支硎山、王世貞亦雅重継儒、三呉名下士争欲得為師友、継儒通明高邁、年甫二十九、取儒衣冠焚棄之、隠居崑山之陽、構廟祀二陸、遂築室東佘山、杜門著述、有終焉之志、工詩善文、短翰小詞、皆極風致、兼能絵事、又博文強識、経史諸子、術伎稗官与二氏家言、靡不較覈、或刺取瑣言僻事、詮次成書、遠近競相購写、徴請詩文者無虚日、性喜奬掖士類、屨常満戸外、片言酬応、莫不当意去、暇則与黄冠老衲窮峯泖之勝、吟嘯忘返、足跡罕入城市、其昌為築来仲楼招之至、黄道周疏称、志尚高雅、博学多通、不如継儒、其推重如此、侍郎沈演及御史、給事中諸朝貴、先後論、薦謂継儒道高歯茂、宜如聘呉興弼故事、屢奉詔徴用、皆以疾辞、卒年八十二、自為遺令、纖悉畢具、と見える。

(13) 陸樹声（一五〇九～一六〇五）の伝は明史二一六に見える。字与吉、松江華亭人、初冒林姓、及貴及復、家世業農、樹声少力田、暇即読書、挙嘉靖二十年会試第一、選庶吉士、授編修、三十一年請急帰、遭父喪、久之起南京司業、未幾、後請告去、（中略）、神宗嗣位即家拝礼部尚書、（中略）樹声端介恬雅、難進易退、通籍六十余年、居官未及一紀、与徐階同里、高拱則同年生、両人相継柄国、皆辞疾不出、為居正所推、卒不附也、已、給廩隷如制、加太子少保、再遣存問、（中略）樹声年九十七卒、贈太子太保、謚文定、と見える。

(14) 巻十六に見える。山谷の伝は宋史四四四に見える。黄庭堅字魯直、洪州分寧人、幼警悟、読書数過輒成誦、舅李常過其家、取架上書問之、無不通、常驚、以為一日千里、挙進士、調葉県尉、熙寧初、挙四京学官、第文為優、教授北京国子監、留守文彦博才之、留再任、蘇軾嘗見其詩文、以為超軼絶塵、独立万物之表、世久無此作、由是声名始震、知太和県、以平易為治、時課頒鹽筴、諸県争占多数、太和独否、吏不悦、而民安之、（中略）庭堅在河北与趙挺之有隙、挺之執政、転運判官陳挙承風旨、上其所作荆南承天院記、指為幸災、復除名、羈管宜州、三年、徙永州、未聞命而卒、年六十一、庭堅学問文章、天成性得、陳師道謂其詩

得法杜甫、学甫而不為者、善行、草書、楷法亦自成一家、与張耒、晁補之、秦観俱游蘇軾門、天下称為四学士、而庭堅於文章尤長於詩、蜀、江西君子以庭堅配軾、故称蘇、黄、軾為侍従時、挙以自代、其詞有瓌偉之文、妙絶当世、孝友之行、追配古人之語、其重之也如此、初游潙皖山谷寺、石牛洞、楽其林泉之勝、因自号山谷道人云、とある。仏教にかかわる記述はまったく見られない。なお、蘇東坡の伝においても仏教に関する記述がないことについては拙稿（注(19)）においてふれたことがある。

(15) 茅鹿門とは茅坤（一五一二～一六〇一）のこと、鹿門はその号である。明史二八七に伝が見える。字順甫、帰安人、嘉靖十七年進士、歴知青陽、丹徒二県、母憂、服闋、遷礼部主事、移吏部稽勲司、坐累、謫広平通判、（中略）坤既廃、用心計治生、家大起、年九十、卒於万暦二十九年、坤善古文、最心折唐順之、順之喜唐宋諸家文、所著文編、唐宋人自韓、柳、欧、三蘇、曾、王八家外、無所取、故坤選八大家文鈔、其書盛行海内、郷里小生無不知茅鹿門者、鹿門、坤別号也、と見える。

王聖俞のことはわからない。

李卓吾は李贄のことで、「明人伝記資料索引」には、字卓吾、晋江人、嘉靖卅一年挙人、万暦中官姚安知府、士大夫好禅者、往往従贄游、小有才弁、一旦自去其髪、冠服坐堂皇、上官勒令解任、居黄安、日引士人講学、雑以婦女、専崇釈氏、卑侮孔孟、北游通州、為給事中張問達所劾、逮死獄中、有李氏焚書、李氏焚余、蔵書、続蔵書等、と見える。明史の列伝のなかでは、耿定向の伝（二二一）、張問達の伝（二四一）、また焦竑の伝（二八八）の中にその名が見える。

楼迂斎のことはわからない。

陶石簣の伝は明史二一六に見える。陶望齢、字周望、会稽人、父承学、南京礼部尚書、望齢少有文名、挙万暦十七年会試第一、殿試一甲第三、授編修、歴官国子祭酒、篤嗜王守仁説、所宗者周汝登、与弟奭齢皆以講学名、卒謚文簡、と見える。石簣とは号である。明史にはほかに馮従吾の伝（二四三）、周宗建の伝（二四五）、劉宗周の伝（二五五）、徐渭、黄輝の伝（ともに二八八）などにその名が見える。

(16) 戯曲小説叢攷（一九七九年五月　中華書局）所収。

(17) 陳眉公四種と題し、広文書局より出版されている（民国五十七年六月）。

(18) 磯部彰「読書人層の『西遊記』の受容について―明後期の諸文芸との関係をめぐって―」（富山大学人文学部紀要第十二号　一九八七年三月）は白話小説を排撃するのも官僚、読書人階層でありながら、同時に小説を手にとり、積極的に読もうとするのも彼らであり、また他の作品に抄引することもあることを実証する。

(19) 拙稿「三言における東坡と仏印」（東洋文化復刊第五十四号　昭和六十年三月一日）には三言と清平山堂話本における東坡にまつわる話についていささか検討を加えた。

「醉翁談録」巻之二には子瞻判和尚遊娼と題する話で、これはまた、「緑窗新話」巻上に蘇守判和尚犯姦と題してみえる。また「緑窗新話」巻下には蘇東坡携妓参禅と題する話が見える。「冷斎夜話」に出ずと注する。「調謔録」にも同様の話をおさめるという。

(20) 李公麟字伯時、舒州人、第進士、歴南康、長垣尉、泗州録事参軍、用陸佃薦為中書門下後省刪定官、御史検法、好古博学、長於詩、多識奇字、自夏、商以来鍾、鼎、尊、彝、皆能考定世次、弁測款識、聞一妙品、雖千金不惜、(中略)、元符三年、病痺、遂致仕、既帰老、肆意於龍眠山巌壑間、雅善画、自作山荘図、為世宝、伝写人物尤精、識者以為顧愷之、張僧繇之亜、襟度超軼、名士交誉之、黄庭堅謂其風流不減古人、然因画累、故世但以芸伝、とみえる。

(21) 大正二年　東京曹洞宗青年会刊写　駒沢大学一〇三・二―三（六大家講演の内）

(22) 「太平広記」三八七に円観と題し、出甘沢謡と注しおさめられ、また、「唐人小説」（汪辟疆校録　上海古典文学出版社　一九五五年）にもおさめられる。

(23) 師民瞻詩注というのはよくわからない。

(24) 破琴詩は詩集巻三十三に見える。長い叙が付されてある。

(25) 張耒の伝は宋史四四四に見える。字文潛、楚州淮陰人、幼穎異、十三歳能為文、十七時作函関賦、已伝人口、游学於陳、学官蘇轍愛之、因得従軾游、軾亦深知之、称其文汪洋沖澹、有一倡三嘆之声、弱冠第進士、歴臨淮主簿、寿安尉、咸平県丞、（中略）耒儀観甚偉、有雄才、筆力絶健、於騒詞尤長、時二蘇及黄庭堅、晁補之輩相継没、耒独存、士人就学者衆、分日載酒殽飲食之、誨人作文以理為主、（中略）作詩晚歳益務平淡、効白居易体、而楽府効張籍、久於投閑、家益貧、郡守翟汝文欲為買公田、謝不取、晚監南嶽廟、主管崇福宮、卒、年六十一、建炎初、贈集英殿修撰、と見える。

(26) 燕石斎補五燈会元というのもよくわからない。五燈会元の補遺には径山興聖万寿禅寺前住持比丘呉郡文琇によるものがあるが、これには東坡に関する記述は見えない。

(27) この趙開美という人物についてもよくわからない。

(28) 東坡の妹が秦観と結婚するというのは虚構である。秦観は黄庭堅、晁補之、張耒とともに蘇門四学士とよばれる。伝は宋史四四四に見える。字少游、一字太虚、揚州高郵人、少豪儁、慷慨溢於文詞、挙進士不中、強志盛気、好大而見奇、読兵家書与己意合、見蘇軾於徐、為賦黄楼、軾以為有屈、宋才、（中略）除太学博士、校正秘書省書籍、遷正字、而復為兼国史院編修官、上日有硯墨器幣之賜、（中略）徽宗立、復宣徳郎、放還、至藤州、出游華光亭、為客道夢中長短句、索水欲飲、水至、笑視之而卒、先自作挽詞、其語哀甚、読者悲傷之、年五十三、有文集四十巻、観長於議論、文麗而思深、及死、軾聞之嘆曰、少游不幸死道路、哀哉、世豈復有斯人乎、と見える。

(29) 張星烺氏の指摘で、南宋説話人の説参請諸家の話本の一種であろう、といわれる。沢田瑞穂「仏教と中国文学」済顛酔菩提の項に引かれる（国書刊行会　昭和五十年五月一七九頁）

(30) 荘司・清水・志村訳「中国の笑話　笑海叢珠・笑苑千金」（筑摩書房　一九六六年）に遊戯詩五首と題する一篇がある。例をあげて注とした。

(31) 小川陽一「「軽薄」考―明代白話短篇小説と善書」（加賀博士退官記念　中国文史哲学論集　昭和五十四年三月講談社）は東坡の軽薄ぶりを主題とする「警世通言」巻三王安石三難蘇学士、をもとりあげて検討される。

(32) 「蘇東坡」（合山究訳　明徳出版社　昭和五十三年九月）九頁。

(33) 「蘇東坡詞」東坡画目　甲　画竹の項　紹興二年為羅浮鄧守安道師作墨竹長手巻に附す、「東坡与羅浮鄧道師守安交往之記録（拠王文誥「蘇文忠公詩編註集成総案」）

(34) 王水照「蘇東坡」（上海古籍出版社　中国古典文学基本知識叢書　一九八一年十一月）五七頁。
なお、東坡と仏教を論考された研究には、蘇軾と仏教　竺沙雅章　東方学報第三十六冊　昭和三十九年十月
蘇東坡の文学と仏教　吉川幸次郎　吉川幸次郎全集　第十三巻
があり、多くの示唆をうけた。